

消化器外科・小児外科

● スタッフ (2021 年 10 月 1 日現在)

診療科長 土田 明彦
 医局長 太田 喜洋
 病棟医長 瀧下 智恵
 外来医長 真崎 純一

医師数 常勤 30 名
 非常勤 21 名

● 診療科の特徴

当科では成人の消化器疾患と、小児外科を扱っている診療科です。消化器疾患を臓器ごとに上部（食道・胃）、下部（大腸・肛門）、肝胆膵の各グループに分け、また小児外科グループも含め、最先端の医療を提供できるように診療・研究を行っています。

食道癌については、早期癌に対して消化器内科と合同で内視鏡下粘膜下層切開剥離術（ESD）を行い、進行癌にはロボット支援手術を含めた胸腔鏡下食道切除術を行っています。また、手術療法のみならず、切除不能食道癌に対する根治的化学放射線療法（DCF-R）を行い、良好な成績を得ています。

胃癌に関しては早期癌及び進行癌の一部に対して腹腔鏡下胃切除を中心とした低侵襲手術を行っています。ロボット支援下胃切除術も開始しております。進行癌に対しては、新規抗癌剤による治療を導入や、ダウンスレーシングしてから手術をおこなう Conversion Surgery も行っています。多施設共同研究に参加して新規治療方針の決定に貢献しています。一部の進行癌に関しては治療前の腹腔内の転移などを確認するための審査腹腔鏡手術を行うこともあります。また、胃粘膜下腫瘍に対しては、消化器内科と合同で腹腔鏡・内視鏡合同手術（LECS）も行っています。病的肥満症に対する腹腔鏡下減量手術も行っております。

肝胆膵領域では、膵癌など悪性疾患を含め低侵襲手術であるロボット支援手術を積極的に取り入れており、近年症例数が増加しております。膵癌に対しては特に力を入れており、局所進行膵癌に関しては化学療法を行った後手術を行う Conversion Surgery を含めあきらめない治療を行っています。また、癌の制御を目指し手術だけでなく新規抗癌剤などによる術後補助療法を積極的に行うとともに、その副作用を患者血液の遺伝子解析を利用して予測する研究も行っており治療に役立たせております。

結腸癌・直腸癌手術の約 80%前後を、低侵襲手術（ロボット支援・腹腔鏡下）に施行し良好な成績を得ています。保険収載以前より臨床試験として施行していたロボット支援直腸切除術は、東日本トップクラスの症例数であり、2022 年度より保険収載となったロボット支援結腸切除術も導入して参ります。また、手術療法のみならず、術前・術後治療から進行・再発治療までの集学的治療を行っています。

小児外科領域は食道裂孔ヘルニア・Hirschsprung 病・鼠径ヘルニアに対して腹腔鏡下手術を導入し良好な成績を得ています。また小児泌尿器科的疾患も積極的に手術を行い良好な成績を収めております。

● 診療体制と実績

全体の手術総数は 859 例でした。例年 750 ～ 950 例で推移しております（図 1）。2018 年 4 月より消化器癌に対するロボット支援手術が保険収載されましたが、当科では以前より食道癌・膵臓癌・大腸癌に対して臨床試験を経てロボット支援手術を導入し積極的に手術件数を増やしています。

食道癌の切除例（手術・内視鏡的切除）は年間 34 例で、胸腔鏡下食道切除術を含む手術は 31 例で、早期癌に対して行われた内視鏡下粘膜下層切開剥離術は 1 例でした（図 2a）。

胃癌の切除例（手術・内視鏡的切除）は年間 60 例で、腹腔鏡下手術は 43 例でした（図 2b）。腹腔鏡手術の割合は年々増加傾向にあります。来年度にはロボット支援胃切除術も導入予定です。

肝切除・膵切除例はそれぞれ年間 34 例と 144 例です。特に膵臓疾患については近年増加傾向にあり、低侵襲手術（腹腔鏡下・ロボット支援下）を積極的に取り入れております（図 2c,d）。

結腸癌・直腸癌の切除例は年間 223 例です。また、かねてから手術症例のうち 70 ～ 85%の症例に対して低侵襲手術を取り入れており、その割合は年々増加傾向にあり、良好な成績を得ております。IBD に対する外科治療は 23 例でした（図 2e）。

小児外科領域は年間 184 例の手術を行っています。2011 年からは小児泌尿器科的疾患も積極的に手術を行っています（図 2f）。

図 1：総手術件数

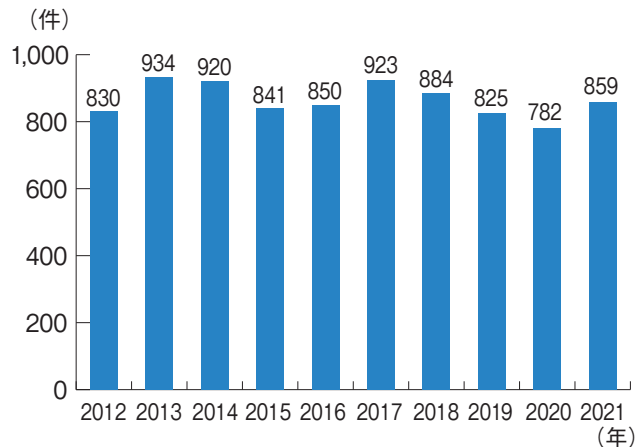


図 2a：食道切除

